ジェームズ C. ローズの空間論とランドスケープデザインのモダニズムにおける位置

James C. Rose and His Vision of Space within the Context of Modernism in Landscape Design

宮城俊作*

Shunsaku MIYAGI

摘要：ジェームズ C. ローズは、アメリカ合衆国のランドスケープデザインにおけるモダニズムの展開に重要な役割をはたした人物である。1938 年から 39 年にかけて、*Pencil Points* 誌に掲載された 7 編の論説を主要な対象として、彼の空間論を構成する要素とその構造を検討した。ボザール様式への反駁を契機として、キュビズム的な空間認識の論理を住宅庭園に適用する中から、空間のヴォリュームとその分節による空間構成の手法が考究された。また、空間を区分する要素として植物材料を重視し、その規格化を試みることによって建築デザインとの共通性が確保され、屋外空間との統合による空間造形の論理が支えられていたことを指摘した。

はじめに

1930 年代後半は、アメリカ合衆国においてランドスケープデザインのモダニズムが胎動しはじめた時期にあたる。この時期の運動は、後の 1950～70 年代にこの職能をリードした数人のデザイナーが中心となって展開されたものとして語られるが、この運動自体は、ひとつのマニフェストの下に複数の人物が結集することによって展開されたものではなく、ほぼ時期を同じくして行われた個別の活動に見だされた共通点を拠り所として、後にモダニズムのレッテルが貼付されたものであった¹⁾。したがって、その根拠となった空間思想については、運動に関わった人々の間に相応の差異が認められる。ランドスケープデザインのモダニズムは、これら個別の主張とその具体的な空間への投影のありかたを詳細に検討することから出発し、その成果の蓄積から抽出される、一つの様式を支える思想的なバックボーンの構造として認識される。

本稿では、このような問題意識を前提として、これまでの論考において着目されることの少なかったジェームズ・ローズ (James C. Rose, 1910–91) の空間論をとりあげ、その論旨の要素と構造を明らかにするとともに、ランドスケープデザインのモダニズムにおける位置づけを試みる。具体的には、ボザール様式への反駁を契機とした新しい空間認識、空間構成要素の属性、とりわけ植物材料への関心、空間造形の科学的・経済的合理性の標榜、の 3 項目が主たる論点となる。なお、ローズの空間論に関する既往の論考としては、マルク・スノウ²⁾ によるものがあるが、これは 1960 年代までのローズによる住宅庭園の作品を集大成したモノグラフであり、モダニズムのデザインという観点からの考察がなされたものではない。

1. 1930 年代後半に至るモダニズムの萌芽

本論に先だって、1930 年代後半とそこに至る過程において萌芽しつつあったランドスケープデザインのモダニズムについて、その経緯と概括的な枠組みを提示し、ローズによる一連の論説が発表された時代状況を確認しておきたい。

アメリカ合衆国のランドスケープデザインにおいて、モダニズムの萌芽が認められるのは 1930 年代の初頭、フレッチャー・スティールによる一連の論説が契機となっている³⁾。フランスの近代庭園に啓発されたキュビズム的な空間認識の発見を通じて、形式主義に対する機能的な空間構成優位の主張が繰り返された。し

かし、実作における検証が不十分であったことから、この主張が大きな支持を得ることはなかった。この間、西海岸地域では、大恐慌以後に発生した都市中産階級の住宅とその庭園のデザインにおいて新たな様式の萌芽がみられた。ヨーロッパからいち早く移入されたモダニズムの建築様式に呼応した屋外空間のデザインが試行され、リチャード・ノイトラ、トーマス・チャーチらによる斬新な空間造形が散見されるようになる。これらは、1937 年のサンフランシスコ美術館における展覧会 “Contemporary Landscape Architecture and Its Sources” を通じて全米に知られるようになるが、アメリカ西海岸のローカルな状況を反映するものとして理解されたという面も否定できない。

これに対し東海岸地域では、大恐慌後もいわゆる “Country Place Era” (田園邸宅の時代) にもはやされた新古典主義的・折衷主義的なボザール様式の庭園デザインが主流となっていたが、第二次大戦の勃発を機に合衆国に移住したモダニズムの建築家グロピウス、ブロイヤー、ミース、タナードらが大学教育に携わるに至って、少しずつランドスケープデザインへの影響が現れつつあった。1936 年から 3 年間にわたってハーバードに在籍したローズ、ガレット・エクボ、ダン・カイリーらが建築のモダニズムからの影響を強く意識した背景にはこのような状況がある。少なくとも、ボザール様式一辺倒に対する反駁の動機は、明らかに建築デザインのモダニズム理論から与えられたものであった。

このように 1930 年代後半に至る過程において、ランドスケープデザインの初期モダニズムは、東海岸と西海岸という地域的な状況を反映しつつ展開する段階にあった。しかし、1937 年を境として状況は大きく転換し、モダニズムは一定の普遍性を持つ様式へと発展してゆく。その普遍性に根拠を与えた事象の一つとして、ローズによる一連の論説を位置づけることができるものと仮定し、以下ではその内容を検討する。

2. ボザール様式への反駁

ローズによる 7 編の論説が現在の *Progressive Architecture* 誌の前身にあたる *Pencil Points* 誌上において断続的に発表されたのは、1938 年 10 月から翌 39 年 12 月にかけてである。またこれらと前後して、カイリー、エクボとの連名による 3 編の論説⁴⁾ が *Architectural Record* 誌において発表されている。当時、この 3 名はハーバード大学ランドスケープアーキテクチャ

*千葉大学園芸学部緑地・環境学科

学科に在籍していた現役の学生であり、彼らの行動は大学教育の権威に対する挑戦として受けとられていた⁵⁾。なぜなら、当時の合衆国内の大学におけるランドスケープデザインの教育は、ほぼ絶対的にボザールの様式理論に準拠してすすめられていたのだが、ローズらの論説の主旨は、これへの反駁を動機として構成されていたからである。

「いわゆる近代建築は、新しい素材と工法の発見によってもたらされたものだが、ランドスケープデザインでは素材自体が不変であり、したがって新しい様式が生まれる必然性はない、我々はそう教えられている。つまり、我々は早くも終の住処を見いだしてしまったのだ。我々の墓標はボザール様式の墓地の軸線上にあって、そこに敬意をもって近寄る人々に目には、“樹木は樹木であって、永遠に変わることはない。しかるにモダン・ランドスケープデザインはありえない”，などと刻印された一文が見えてくるかもしれない。」⁶⁾。ここには、ボザールの形式論に対するアイロニカルな感情が込められており、一方ではモダニズムの受容において先行する建築や他の視覚芸術からの疎外感が表明されている。では、このような反駁の根拠となった新たな空間像はどのようなものであったのか、ボザール様式との対比を通じて具体的に見てみよう。

3. 空間認識の転換

(1) 軸線の否定とキュビズムの空間認識の適用

周知のようにボザールの形式的な空間構成では、建築の平面ないしは立面構成、あるいは主要な眺望対象との位置関係によって規定される軸線の存在を前提とする。屋外空間を構成する様々な空間単位は、その空間的な序列に従って、この軸線の両側において対称的なバランスを達成するように配置される。視点は、軸線の一端に固定されるか、またはその軸上を直線的に移動するのみとなる。これに対してローズは、「仮に視線に軸を想定したならば、庭園の空間においては軸線の数が無限にあるはずだ。その中から1～2本の軸線を選び、与えられた視点からの像をデザインしてしまえば、我々は無限の可能性を失うことになる。」⁷⁾とし、空間の適切な区分と多様な視点の存在を主張する。

この主張の背景にはキュビズム的な空間認識の論理がある。事実、最初の論説の第1ページ目にはローズ自身による住宅庭園の平面図と“Figure”と題されたピカソの絵が並置され、部分と部分の抽象的な関係が全体的なパターンの特徴となっている旨の解説文がある。現実の空間に同時多発的な像を想定することによって世界観を構築するというキュビズムの論理に基づけば、軸線の排除によって線形の透視図的な像は大きく拡張され、屋外空間には多面的で全方位的な空間が生成されることになるのである。

(2) マス (mass) に対するヴォリューム (volume) の優位

ローズにとって「軸線や型を平面上に想定することから出発する方法は根本的に誤りであり、土地の形態は空間の区分から生成する。」⁸⁾ものである。その逆、即ち土地の平面形態が先行し、そこから空間の区分が派生するという関係は認められない。空間の区分という概念は、空間自体を自己完結する物質の塊(マス)として捉えるのではなく、空間に外接して存在する物質的な要素⁹⁾によって外側から規定される非物質的な容量(ヴォリューム)として捉えることを前提としている。

「物質的な構成要素によって遮られたり、囲まれたりした空間のヴォリューム中を動く人間は、あらゆる地点からあらゆる任意の方向へ向けた空間的なヴィスタの存在を知覚することができる。これは、たった一つの視線をもたすだけの恣意的な軸線によってかわるものである。」¹⁰⁾。この一節は、ボザールの形式が空間を物質的なマスとみなし、これを既定の線のヴィスタに沿って配列することによって軸線に実体を与えているという事実に対するア

ンチ・テーゼとしての意味を含む。ローズの空間認識においては、マスに対するヴォリュームの優位が絶対的であった。

なお、この点に関しては、1932年にニューヨークの近代美術館において開催された建築の“The International Style”展および同展覧会のカタログに示されたモダニズム建築の第一原則¹¹⁾の屋外空間への適用であることは明らかである。

(3) 空間の区分と空間構成

ヴォリュームという概念によって空間を区分し、その組み合わせから全体的な屋外空間を構成するためにローズが借用したのは、構成主義の考え方である。「ランドスケープデザインにとっては、ヴォリュームの中における空間関係を主題とした作品を制作する構成主義のアーティストがおそらく最も多くのものをもたらすはずだ。空間の透過性や面の構成によってもたらされる断続的な可視領域の形成を屋外空間に適用すれば、軸線によるデザイン手法の限界から我々は解放される。」¹²⁾と述べ、前述した最初の論説では、テオ・ヴァン・ドーズバーグの構成主義的な抽象画“Rhysm of Russian Dance”(1918年)とミース・ファン・デル・ローエによる建築平面図(1929年)が添付されている¹³⁾。前者は、一定の幅をもった線分の組み合わせによって平面の中に生成される余白の区分と連続が主題であり、後者ではそれらが建築平面図の中で壁体とそれらによって規定される空間の区分と配列に置き換えられている。線分あるいは垂直な壁体を構成要素として区分される多様な空間が、相互に貫入し一つ一つの連続する空間として認識される全体像を構成する。

この空間認識は、ローズ自身による住宅庭園の模型に最もよく還元されている。住宅の壁面、プールのエッジ、ウォール、生け垣、高木の列植などの構成要素によって区分された三次元の空間が形成する庭園の全体像が明確なものとなっていた。(写真-1)ここから、多様な構成要素による屋外空間の区分と連続、即ち、空間構成手法としての分節(articulation)を達成するための構成要素の扱い方へとローズの関心は拡張されていった。

(4) 模型によるデザイン・スタディ

ローズによる空間認識の転換を裏付ける要素として、デザイン・スタディのプロセスにおける模型の多用をあげることができる。ローズは、プレゼンテーションツールとしての模型の多用を「一時的な流行現象」¹⁴⁾であるとする一方で、「模型においては、地形の立体感、動線、空間利用、物質的・非物質的な空間形態など、デザイン上の全ての課題をあらゆる視点から一度に捉えることができる。模型では、立面や平面のパターン、画像ではなく、人間を含めた構成要素と時間や空間の関係を扱うことができる。」¹⁵⁾と述べており、デザインされた空間を認識するための媒体として、その有効性を主張した。事実、本稿の主たる検討対象となっている7編の論説には、そのすべてにおいてローズ自身による実験的な住宅庭園の模型写真が添付されている。模型によるデザイン・スタディの奨励は、キュビズム的な空間認識の論理をそのまま反映したものと言える。

4. 空間構成要素の属性に対する関心

さて、空間のヴォリュームを分節し、その中を移動しつつ多様な視点から空間を連続的に体験することのできる場を創出するうえで、構成要素に対する理解と扱い方への関心が惹起されるのは、当然のことであった。「純粋なランドスケープにおける空間のヴォリュームは、地面、舗装、水面、地被植物などによって底面が、樹木の葉面、壁面、構造物などの垂直的な構成要素によって側面が、天空、樹木の枝、屋根などによって上面が規定される。我々が屋外空間を移動する時に知覚されるのは、様々な行動に合わせて設定された構成要素の変化である。」¹⁶⁾との認識がこの点を物語っている。

写真-1 ジェームズ・ローズによる住宅庭園のスタディの模型 出典：文献5)

図-1 ジェームズ・ローズによる植物材料の規格に関するスタディ 出典：文献25)

また、「ランドスケープの本質的な美と意味は、意図された機能と表現を達成するために行われる空間ヴォリュームの区分とその構成要素との有機的な関係によってもたらされる。」¹⁷⁾であり、「聡明なランドスケープデザインとは、空間の構成要素に対する深い理解と感性からのみ生まれる。」¹⁸⁾とした。さらには、「ボザール様式のデザイナー達は、空間の構成要素を装飾とみなす域から脱せず、絵画的な構図をつくりだすためにそれらを折衷し、幾何学的なパターンに無理やりおしつけている。」¹⁹⁾と批判し、「すぐれた近代建築や近代彫刻がそうであるように、構成要素の物質性を正当に評価し利用すること。」²⁰⁾が肝要であると表明している。

ここで注意しておくべきことは、空間のヴォリュームを規定する構成要素の物質的属性が空間体験の質を決定するという見方を提示している点にある。これによって、それまで構成要素という抽象的な表現にとどまっていたものを、物質的な属性を持つ材料に置き換えて考える立場が明確になったものと考えられる。

5. 植物材料の重視

空間のヴォリュームを規定する構成要素に物質的な属性を仮定し、それらを材料として位置づける過程において、ローズが特に強調したことは、植物材料の有用性であった。この点について見てみよう。

「空間の構成要素として見た場合、あらゆる植物に可能性があり、個々の植物にはそれぞれ固有の特徴が見いだされる。」²¹⁾、あるいは「折衷的な土地のパターンの中に見いだされる植物をその恣意的な位置から引き抜き、ランドスケープの有機かつ構造的なパーツとして移しかえた瞬間から、空間の構成要素としての植物材料の存在感が表現され、空間そのものが現れる。」²²⁾という表現がある。また、「近代建築が冷徹で非人間的だと嘲笑されるイメージを払拭できないでいる。」²³⁾ことに対して、植物材料こそがモダニズムのランドスケープデザインをそのような批判から救うものだとしている。

空間の構成要素として植物材料を重視する態度は、植物を個体として扱うという考え方にも端的に表れている。ここでも、植物をひとまとまりのマスとして扱うボザール様式のデザインについては、「植物材料を驚くべきほどに軽視しており、植物に関する知識について無関心を装うがごときだ。」²⁴⁾と批判する。個々の植物の形態的・生理的な特徴を十分に理解することが、材料としての有効性を高めると考えており、1939年4月号に掲載された論説では、末尾に東海岸北部地域において用いられる主要な樹種の

リストが添付されている²⁵⁾。これは、後に出版された自著の中にも模式化されて掲載されている²⁶⁾。(図-1参照) このリストでは、延べ187種がその樹形の特徴によって、柱形、横長形、下垂形、放射形、球形あるいは楕円形、不定形の6つのカテゴリに大別され、さらには、それぞれにおいて成長時の平均的な樹高と3段階に設定された葉色の明度(明るい、中間、暗い)による細分類がなされている。ただし、それぞれの樹種の評価がなされているわけではなく、客観的にその特徴を分類整理しているのみであった。ここでは、生物学的な観点からの分類ではなく、空間構成の材料として植物を位置づけていることが明らかであり、材料としての規格化を試みているようにも見受けられるであろう。その根底には、「木材、レンガ、鋼材、コンクリートなどを用いる場合と全く同様の知識と効率を期待しつつ植物材料を使用することは十分に可能である。」²⁷⁾との考えがあった。

6. 科学的・経済的合理性の標榜

植物材料をマスから分離された個体として扱うことは、「植物を科学的にコントロールし、その特徴を十分に引出し、伸縮自在な可塑性を利用する」²⁸⁾ために必要なことであった。植物をパーツとして取り出し、「ある条件下における個々の植物の成長速度と形態的な特徴が与えられれば、モジュール化された工業製品と同様に便利な材料として植物を利用できるであろう。」²⁹⁾とは、現代の感覚からすればやや楽観的かつ粗雑な展望ではある。しかし、「空間を経済的に構成するためには、構成要素となる材料の効率的な生産と利便性の高いデザインの手法が必要。」³⁰⁾というモダニズム建築と同じ成立基盤を適用する観点に立てば、このような主張の展開も理解され得る。

さらに、ここでいう経済的合理性は、「有用なランドスケープを形成するうえでの経済性と利便性は、維持管理、植物のコントロール、地盤造成の3つの主要な要素をいかに扱うかにかかっている。」³¹⁾との主張にも示されている。これによって居住空間全体の合理的な構成、即ち、建築と屋外空間の統合による経済的な空間造形と空間利用への意識が側面から支えられる。ローズは、建築と屋外空間が個別に完結した形態をとることになれば、同じ量の生活活動に対して必要となる空間が増大し、従って維持管理のコストも増大することを明確に意識しており³²⁾、その点に配慮した住宅と庭園のテスト設計を繰り返した。

ローズ自身のプロフェッショナルとしての経歴は、もっぱら住宅庭園の設計によって占められている。そこでの空間造形は、建

図-2 ジェームズ・ローズの空間論の要素と構造

築と屋外空間を統合した全体として意識され、空間の連続性と分節をもたらす構成要素と素材の扱いに集約されてゆく。このプロセスにおいて、ここで標榜されている経済的合理性が有効に作用しているものと考えられる。

結 び

図-2は、ジェームズ・ローズによる7編の論説の内容を詳細に検討することから、彼の空間論の要素と構造を抽出し、それらを模式化したものである。ローズの空間論は、建築と視覚芸術な

どの分野のモダニズムに啓発される一方において、保守的な様式論、とりわけボザールのそれに固執する態度への反駁を契機としている。その要素には、キュビズムやモダニズム建築からの影響による空間認識、空間ヴォリュームの分節による空間構成の概念、空間を構成する要素の関係と物質的属性への関心、植物材料の合理的な取り扱いと規格化の試みがある。そして、それらを総合化した結果として建築と屋外空間を統合した空間造形がもたらされるのであり、当時の社会的要請としての経済的合理性がその結果を側面から支えるという構造を有する。

ところで、ここに抽出した要素と構造は、モダニズム建築の空間論をランドスケープデザインの体系において翻訳したものとなっていることがわかるであろう。合衆国の東西両海岸の地域的狀況を背景として萌芽しつつあったモダニズムに、それなりの普遍性を与えるとすれば、その理論的枠組みを、様式の普遍性を前提とするモダニズム建築に求めるという手順には、妥当性があったと見るべきであろう。

さて、ローズは後年の自著の中でこう述べている。「私は、庭園を一種の彫刻だと考えることが有効であることを発見した。それは鑑賞される物体としての一般的な概念の彫刻ではなく、人が歩きまわると十分な大きさと空隙があり、その動きを阻害することがないほど十分に開放的あり、天空との親交が深まるような体験へと導かれるほど十分に分節されている、そのような彫刻である。これが庭園なのだ。」³³⁾。ローズが主張したモダニズムの理念は、後年の経歴の中で、この一節に表現された住宅庭園の空間像に純粋な心で結実していく。しかし、そのことが逆に、空間の形態よりも空間のしくみと構築のプロセスに重点をおく戦後アメリカにおけるランドスケープデザインの主流から、ローズを遠ざける結果をもたらしたとも言える。ランドスケープデザインのモダニズムが、未だに曖昧な定義に甘んじている一因がここにある。

文献及び補註

- 1) たとえば、1989年10月にカリフォルニア大学バークレー校において開催されたシンポジウム“Modern Landscape Architecture [re] Evaluated”では、この点に関する認識が共有されており、シンポジウムの成果としてとりまとめられたMarc Treibの著書においても確認されている。TREIB Marc (1993): Modern Landscape Architecture: A Critical Review, MIT Press, vii-ix.
- 2) SNOW, Marc (1967): Modern American Gardens - designed by James Rose, Reinhold.
- 3) たとえば、STEELE, Fletcher(1930): New Pioneering in Garden Design, *Landscape Architecture*, 20 (3), 159-177.
- 4) ECKBO, Garrett, KILEY U. Daniel, ROSE, C. James: Landscape Design in the Urban Environment, *Architectural Record*, September, 1938. Landscape Design in the Rural Environment, August, 1939, Landscape Design in the Primeval Environment, February, 1940.
- 5) DOUGLAS, L. William (1986): James

- Rose, The Oxford Companion to Gardens, Oxford University Press, 483-484.
- 6) ROSE, James (1938): Freedom in the Garden, *Pencil Points*, October, 1938, 640.
- 7) ROSE: 前掲 5, 642.
- 8) ROSE: 前掲 5, 640.
- 9) ローズは、空間を外的に規定する要素に material という語を充てているが、後述する植物材料についても plant material という語が用いられている。訳語の意味に混乱を生じることを回避するため、ここでは前者に「構成要素」、後者に「材料」を充てる。
- 10) ROSE, James (1938): Plant Forms and Space, *Pencil Points*, April, 1939, 227.
- 11) HICHCOCK, Henry-Russell & JOHNSON, Philip (1932): The International Style, W.W.Norton & Co., 40-49.
- 12) ROSE: 前掲 5, 642.
- 13) ROSE: 前掲 5, 640.
- 14) ROSE, James (1939): Landscape Models, *Pencil Points*, July, 1939, 438.
- 15) ibid.
- 16) ROSE: 前掲 9, 227.
- 17) ROSE, James (1938): Plants Dictate

Garden Forms, *Pencil Points*, November, 1938, 697.

- 18) ROSE: 前掲 16, 695.
- 19) ROSE: 前掲 16, 697.
- 20) ROSE: 前掲 16, 695.
- 21) ibid.
- 22) ROSE, James (1939): Articulate Form in Landscape Design, *Pencil Points*, February, 1939, 99.
- 23) ibid.
- 24) ROSE: 前掲 5, 642.
- 25) ROSE: 前掲 9, 229-230.
- 26) ROSE, James (1958): Creative Gardens, Reinhold, 200-201.
- 27) ROSE, James (1939): Why Not Try Science, *Pencil Points*, December, 1939, 779.
- 28) ROSE: 前掲 26, 778.
- 29) ROSE: 前掲 26, 779.
- 30) ROSE: 前掲 26, 777.
- 31) ibid.
- 32) ROSE, James (1938): Integration, *Pencil Points*, December, 1938, 760.
- 33) ROSE: 前掲 25, 22.

Summary: James C. Rose (1910-93), an American landscape architect, played an important role in the modernist movement of landscape design in the United States for the period of its development through the late years of 1930s. A detailed examination in a series of his articles published on *Pencil Points* magazine revealed that refutation against the Beaux Arts system and the Cubistic notion of space provided a moment for conversion of spatial disciplines of his garden design. His deep concern with materials, plants in particular, as elements to create articulation and composition in spatial volume of a garden has been developed through this new notion of space and evoked the scientific and economic rationales for design practice. His theoretical approach to garden design summarized in the articles provided a solid foundation to a general understanding of the conception of modernism of landscape design.